



レタリア文学集・21

八作家集
1

江苏工业学院图书馆
藏书章

日本プロレタリア文学集・21

婦人作家集(一)

定価 二八〇〇円

一九八七年九月三十日 初版©

発行者 山 本 功

発行所 株式会社 新日本出版社

〒151 東京都渋谷区千駄ヶ谷四の二五の六
電話 (〇三) 四二三一八四〇二(営業)
(〇三) 四二三一九三三三(編集)
振替番号 東京三一三六八一

印刷所 光陽印刷株式会社

製本所 みさと製本印刷株式会社

落丁・乱丁本がありましたらおとりかえいたします。
本書の内容の一部または全体を無断で複写複製(コピー)して配布することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害になります。小社あて事前に承諾をお求めください。

ISBN4-406-01544-2 C0393

日本プロレタリア文学集・21

婦人作家集
(一)

目次

若杉鳥子

烈日……………九

梁上の足……………二三

棄てる金……………一九

母親……………二三

平林たい子

古戸棚……………三

投げすてよ！……………三六

嘲る……………三

施療室にて…………… 九

夜風…………… 九

荷車…………… 一〇

殴る…………… 一三

森の中…………… 一四

朝鮮人…………… 一六

敷設列車…………… 一七

石鹼工場の同志…………… 一九

耕地…………… 二〇

中本 たか子

赤…………… 二三

恐慌…………… 二五

地下鉄…………… 二六

闘 い……………二六四

鎖……………二七九

工場の前衛……………二八五

卑怯者去らば去れ……………三〇一

レポーター年枝……………三〇〇

再び工場へ……………三二五

壺井 栄

プロ文士の妻の日記……………三二九

屍を越えて……………三三三

月給日……………三九一

大根の葉……………三七八

廊 下……………四〇五

種……………四二五

解

説

佐藤静夫

発表年月日と掲載文献

四九

若杉鳥子

烈日

急坂

私が坂を下りようとした時、下の方から急激な怒号が起つた。

罵る叫ぶ叱咤する、呻く力を張る、そのどの声でもあるように聴えた。

坂上には忽ち多くの人や車が停滞して、みな怖る怖る坂下を見おろしていた。

坂の下では三人の荒くれ男が、三頭の牛に、瓦斯タンクのように偉大な真つ黒な蒸気気缶を牽かして来て、そこでこの急坂を駆け上る為に、真剣になって牛を励ましている処だった。

然し牛はあの調子で意外な儲けものでもしたような顔をして緩る緩ると休んでいる。

まるで鈍重な意地そのもののように見える。牛方の顔はまるで仁王のように血と汗で彩色され、狂気のように物凄いい怒号を続ける。

ほらっしょ、よいっしょお、ほらっしょ、よいっしょお……牛は手綱を強く引つ張られる度に、その白っぽく砂に塗れた大きなからだを支える為に、瘠せた後肢を後へと突っ張って喘いだ。

そうしてやっと、坂の途中まで上りかけた彼等は、そこでちょっとでも気を緩めようものなら、忽ちドオーッと、はずみを啖って、その過重な荷と共に無惨な転落をするだろう。

牛も臀部の筋肉を痛々しく露出させて、極度の努力を示していれば、牛方の男も何とも意味の解らない怒号を発しつつづけている。

今、今、牛も人も気が狂って、何ものにか突進してくるのではないか！

私は思わず何処かに逃げ場を求めようとして周囲を見廻した。

巡査も群衆も皆ひとりでに逃げ道を用意しながら、凝と

その光景を見つめていた。

よいっしょ、ほらっしょ、よいっしょお……牛方はやっぱり、唯是れ鬭争——という氣勢で、愛情も生命も投げ出してしまったもののように、死力を尽して叫ぶ。

それでも牛は、つぶらな可愛い、体の割に小さい瞳を、無邪気に柔順に睨り、咽喉のたるみをいよいよ急しくひこひこと波打たせ涎の糸を地にひきながら、疾う疾う坂を上り切った。

それを見送っていると、私の眼からは熱いものが流れた。しかも大きい牛の体は、更に大きい蒸汽気缶の怪物の影に隠れて、乾いた長い路を、白い沙塵をあげながら、鋸の歯形のように、ギクギクと刻むでいった。

あの努力！ あの努力！

私は其処に人が見ていなかったら面を掩うて泣いたろう。そして私は心の中でいった。

安価なセンチメントだと嗤わないで下さい！ 古くさい譬喩だと冷笑しないで下さい！

人々は、兄弟は、自分は、牛は牛方の男は、今皆苦しみ悩み、黙々と喘いでいる……。

人々も牛を見送ってしまうと、皆いい合わしたようにホッとして汗を拭いて、堰を切ったように急坂をなだれおち

た。

私は人知れず、交番のプラタナスの影で洋傘を翳して、自分の泣虫を耻しながら涙を拭いた。

女と赤ん坊

ある日の午後、貧民窟といつてもいいような、ある場末の乾うどんやの前で、私は若い女の人と話しあっていた。

その婦人の負ぶっている赤ん坊は、この暑中に、赤い綿ネルのボタボタを着て、小さい手を私の方へ差し伸べ、パソルの柄を強く握って放さなかった。

私の顔と傘とを等分に見比べながら、ニコニコと何事をか語りかけている。

肥った可愛い子！

「お子さんは何時お生れでしたの？」

「この一月ですよ」

「まあ大きい事、もうお誕生位に見えるのね、」

私は心から可愛らしい子だと思った。

話はもうそれで途切れてしまった。

婦人は何処か一つ所を凝と無愛想に見つめている。

そして暫く時が経過した。

すると突然高い声が私の胸を貫いた。

「これッ、いまに呉れちゃうんです。」

婦人は自分で自分にその勇氣と決断とを示すように、こんな重大事を事もなげにいい放つと、何かおちつかない風に、おどおどと私の顔を見ていた。

私にも何か急に重いものが、自分の方へ倒れがかったような息苦しさが感じられた。

「折角まあこんなにして、御親類へでもこのお子をおあげになるというんですか？」

対手の感情を支えるような気持ちでいう。

すると婦人は、煙ゆぶっているけれど玉子なりの眼鼻立ちの整った面をふりあげて、

「いいえ、これから捜さなきゃならないんですよ、あなた……」

訴えるような表情でいった。

赤ん坊は背中で機械の亀の子のように、ふりふりと手足を浮かして泳いでた。

何の条件もなしに無造作に与えるという、この快活な赤ん坊を見ると、知らず知らず、私は桃太郎のお婆さんのような喜びを感じずにはいられなくなった。

赤ん坊もその母親のように、中高なはつきりとした顎をしていた。

然し………どういふ運命の子、どういふ遺伝を背負つて、どういふ性格………段々赤ん坊の顔を見ている中に、黒雲のようなものが私の心に襲来してくる。

そして赤ん坊が何か急に、暗い大きい背景の中から浮かみ出してる魔物のように感じられても来るのだった。

またその赤ん坊の生命の中から流れる暖いものが、永遠に向つて蔓草のように根を張つてゆくだろう事を思うと、私はひやりと手をひっこめて、何か非常な冷酷な事を敢てするように、

「さようなら。」と其処を見棄てた。

けれど私はそれから幾日経つても何処までいっても、
「これ今にくれちゃうんです。」そういつて私を見た婦人の瞳が壁虎のように、私の背中に咬いつているような気がしてならない、おそらくは今日までも――。

梁上の足

昼間、街から持って来た昂奮が、夜中私を睡らせなかった。

おまけに、脳天を粉碎しそうな鋳締機の足踏みが、間断なくその妄想の伴奏をした。

私が、骨組み許りのビルジングの作業場の前を通りかかると、其処には今しがた何か異変でもあったと見えて、夥しい人間が集まって急しく動作していた。多分検屍官でもあろう、白い服を被た役人と巡査とを乗せたオートバイが、その前に止まると、今迄梁の上に立っていた黒い人影は、蜘蛛の子のように散ってしまった。

すると、鉄骨と鉄骨との間に架した横木の上に、一人の労働者らしい人間が横たわっている。往来の方へは臍を向

けているので、その脛に捲きついた黒っぽい股引の他は何にも見る事は出来なかった。

群衆は、残照に彩られたビルジングを見上げながら、屍体の引き下ろされるのを待っていた。

「あの男は、独り者なんですかい？」

「もう相当の年配らしいですよ。親も妻子もあるでしょうがなあ」

「どういうもんでしような斯んな場合は、会社の方から、幾分遺族の扶助料でも出すもんでしようかなあ……」

「いいやあ……そういう事は先ず絶対にないといっているでしょうな、感電なんてこういう場合は、大てい感死者それ自身の過失が多いですからね」

「よくよく運の悪い廻り合せです、もう三十分も無事なら、あの男は仕事をすませて、元気な顔で彼処を降りて帰っていったんですが……」

「実際ですよ」

私はこの突発事件が何であろうかを知る為に熱心に群衆の会話を聴いていた。

そうしている中に、私は必ず何処かで、これと同様の事件、寸分違わない出来事に遭遇した事があるように思えて来た。

何処かで！ 確に何処かで！ 遠い過去だったか、夢の中にだったか……

然しそれは私の昏迷でも錯覚でもない。

鉄骨の上に横えられた足、あれは昔若かった父の、農村から都会へと、労働と幸福を求めていった、煉獄の姿としての、私の心の壁画だったから……

私は眠っているのか覚めているのか？

頭の上で鉄締機が鳴りつづける。

鉛色の趾が二つ、私の網膜に貼りついている。気味の悪い、象形文字のような指紋がある。黒い傷痕がある。深い溝がある。

黒い夢だ！ 黒い夢だ！ 何てピストルの銃口を覗くような油臭い夢だろう——私は夢から遁れようと足掻いた。

そこは平原の黎明だった。

父と母と規則正しい足取りで、影絵のように、紫色の線道を歩いてゆく。

彼等は蝸牛のように小さな自作農だった。

私は祖母の背中に蟬みたいに喰つ着いて、大きい土瓶と一緒に随いてゆく。野良へ——

露に濡れた玉蜀黍の葉ばかり、夜会服の貴婦人みたいに、さらさらさら……とそよぐ。

毎日毎日雨が、茅葺屋根の農家を浸した。

若い父は古い木の根株の上で、千本割って何厘というような楊枝をそいでいた。

電光のような鋭利な刃物で、若い生命を削っていた。時溜息を吐いて空を見たり、白い眼をして放心したりしていた。彼はその時小作人だった。

若い母は連根のような腕をして製糸工場へ通った。その頃街には、製糸工場の煙突と肥料屋の倉庫が殖えた。

太い煙突から黒龍のように空へ登ってゆく煤煙の下で、若い母は屑糸を出して罰しられながら喘いでいた。

そこへ猿みたいな赤ン坊が生れた。毎年、続けさまに生れた。

然し私の可愛い乳兄弟達は、新月のような薄眼をして崇高な寢息をたてながら、巴旦杏のように成熟していった。

寒い晩、私は子供達と、穴の中の藁苞に貯えてある銀杏の実を出して、炉の縁で焼いて食べた。父は何時でも厚ぼったい唇を開けて黙りこくっている。

狭い家の中で鬱してくると、私は直ぐ下の男の児をいじ

めた。

「姉こう！ さあ、やってこい姉こう」

彼はむきになって攻勢をとる。

私は彼が男の子であるのと、自分が彼よりも年輩なのを好い事にして、徹底的に征服しようと試みる。小さい子供達も一斉に暴れ出す。小さい家の中で子供等は益々狂暴になって、楊枝削りのナイフを振り廻して私に迫ってくる。私は芳ばしい楊枝の樹を噛みながら悪口をいって逃げ出す。

若い父はいつの間にか野良へ出てゆかなくなった。行商を始めて見たのだった。

雨が降って毎日父が家にいる時は、入口の土間に桐油を被た、玩具や雑貨の荷が、生活の残骸のように骨ばって積んであった。

それからまた父は行商を止めて、すてきに好い事を始めた。子供達にも好い仕事を与えられた。それは煉瓦工場の土担ぎだった。

「今日はちやあや（父のこと）の弁当を持ってゆくのは私だよ」

「ううん今日は俺だ」

「昨日お前が持つて行ったんじゃないか」

「嘘つけ、おらはただお前に随いて行つたんだ、今日こそ、俺一人でいぐ！」

子供は大臣のオフィスにでも行つて見るように、父の働いてる工場にいつて見たがった。

皆で祖母の作つたお弁当を奪いあつた後、結局皆でぞろぞろと長い松原を歩いていった。

野の中に蛇の目傘を拡げたような穹窿形くわうりやうの屋根が三つ、青麦の波の上に泛んでいる。

そこは、下野煉瓦製造工場。

子供等は門の中へ入つてお弁当を置いてくると、急いで出て来て川向うへ廻った。

円い工場の丘を半分抱いて流れてる川の水は、土を搬んでくる小舟の為に攪乱されて濁っていた。

開け放たれた窓の奥に、高い天井から斜めに廻転してる調帯の一部が、長蛇のように見えていた。そこから間断なく切り出される大きい羊羹のような長方形の土塊は屋外に搬び出されると、手拭を冠つた女達の手に、一箇一箇と筵の上に並べられた。

甘そうな水分を含んだ、しっとりとしたお菓子が、几帳面に並んだ上を、白い雲の集団が煤色の影を落しながら飛